

小西さんの横に、今村理髪店が分店を開業した。

若い人たちの「溜まり場」を形成していたが、暫くして閉店したがその時代を特定できない。

私の記憶で鮮明なものは、叔父の菊二が、英国大使であった吉田茂等と、時の外務大臣・松岡洋右の枢軸外交に反乱をして、ポルトガル公使の職を辞し、田舎に還って来たことがあるが、今村理髪店で髭を剃った時に今村の主人が、えらく丁寧に髭をあたってくれた、様子を思い出す。

叔父が、「今使っているシャボン」と聞いた時に、今村主人は「花王」と答えたが「それは駄目だ」と言われ、恐縮していた記憶が蘇る。

後ろで機音がしていたが、玉井さんの機を織る音であつたらう。

げんべし山の持ち主であつた、山本さんは地所持ちであつたから「草分け」の一員であつたかもしれない。

高山さんは、寺井駅前の高山乾物店と親類で、干物・昆布などを車に載せて来た。

高山さんが、油断していると昆布など、子供たちが失敬した、当時は何時も腹をへらした、子供がうろろうろしていたものである。

鰯の干物の棒を、失敬すると半日も噛んでおれたものであるから、子供にとっては大収穫であつた、案外、高山さんは知っていたのかも、

朝川呉服店は、運動会の帽子やパンツを売っていた。
末政百貨店と同じような規模ではなかつたらうか。

福井さんは「うどん製造所」でいつも盛大に湯気を揚げていた。

白江さんは「造り酒屋」で、先々代は「布袋様」のような、福ふくしい主人であつたので貫禄があり、子供心に恐ろしい人の記憶が消えない。

隣は、米沢県会議員の家で、大きな機業場を経営していた。

住宅の後ろは、第二道路を挟んで、鋸建ての工場で、時間を置いては蒸気を噴く箇所があるのが珍しく、揃って子供たちが見に行ったものである。

米沢家の盛大な頃に建てた、素晴らしい木造の住宅があつたが、無くなって本当に惜しいと思う。

高山さんの家は、新聞記者がいると言うことで、子供心に一目を置いた。何処の新聞かは知らない、当時は、新聞記者はインテリの最先端の職業であつた。

四つ藤さんは、魚屋で母に言われて魚を買いに行ったもんだ。
美しい石畳の濡れた店構えが昨日のように思い出される。